

歩いて楽しむ街もりおか



上の橋擬宝珠(ぎぼし)  
慶長14年・16年  
[国指定重要美術品]



岩手県公会堂  
昭和2年



紺屋町番屋  
(盛岡消防団分団) 大正2年



ごご九  
江戸末期～明治・創業文化13年



盛岡信用金庫本店  
(旧盛岡貯蓄銀行) 昭和2年



岩手銀行中ノ橋支店  
(旧盛岡銀行本店) 明治44年  
[国指定重要文化財]



南昌荘  
明治18年

喫茶「あこがれ」



石川啄木の処女詩集から名付けられた、喫茶「あこがれ」。自慢のおりじなる珈琲は、お客様のオーダーを頂いてから豆を挽き、南部鉄瓶で沸かしたまろやかなお湯でドリップし、ご提供しております。香り高い珈琲を手に取ると、一つずつ描きしたオリジナルのソーサーに、小さな青春館の建物の絵が。クラシックな重要文化財の中で、ほっとするひと時をどうぞお楽しみ下さい。

■利用案内

- ・開館時間 10:00～18:00 (ただし、入館は17:30までをお願いします)
- ・休館日 毎月第2火曜日 年末年始 (12/29～1/3)
- ・入館料 無料 (2階展示ホールは有料の場合がございます)

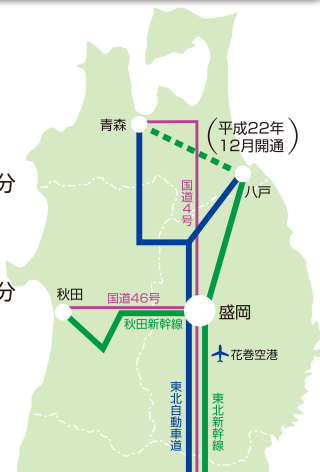
盛岡市中ノ橋通一丁目1-25 TEL & FAX 019-604-8900  
<http://hellomorioka.or.jp/seishunkan/>  
 E-mail: seishunkan@odette.or.jp

- ・交通 JR盛岡駅より
- ①岩手県交通にて『バスセンター』で下車、徒歩3分(所要時間約25分)
- ②岩手県交通にて「水道橋行き」『青春館前』で下車(所要時間20分)
- ③タクシーにて『もりおか啄木・賢治青春館』前下車(所要時間10分)

- ・Open ..... 10:00 a.m.— 6:00 p.m.  
(Last Admission at 5:30 p.m.)
- ・Note ..... Closed Every Second Tuesday  
New Year Holiday  
(12/29 — 1/3)
- ・Admission..... Basically Free  
(Special Exhibitions or events require admission fee)
- ・Address..... Nakanohashi-Dori 1-1-25,  
Morioka City, Iwate, 0200871

●アクセス

- 鉄道(新幹線)  
東京——盛岡 約2時間30分  
仙台——盛岡 約1時間
- 高速道路  
東京——盛岡 約6時間30分
- 飛行機利用の場合  
花巻空港——盛岡 約40分  
(バス又は車利用)



2010.04.35000

国指定重要文化財



もりおか  
啄木・賢治青春館

MORIOKA TAKUBOKU & KENJI MUSEUM



Designated as a National Important Cultural Property  
MORIOKA TAKUBOKU & KENJI MUSEUM



「若き石川啄木」像  
舟越保武 作

もりおか啄木・賢治青春館は、明治43年(1910)に竣工した旧第九十銀行を保存活用して、石川啄木と宮沢賢治が青春を育んだ盛岡の街と二人の青春時代を紹介しています。

偉大な文学者として大きな事績を残した二人は、明治から大正にかけて盛岡中学校に学び、その才能に目覚めました。当時の盛岡は洋風の近代的な建物が立ち始め、モダンな街へと変わりつつありました。啄木と賢治がこよなく愛し、いつのときも忘れることのなかった当時の盛岡と、二人の青春時代に思いを馳せながら、青春館でのひとときをお楽しみください。



「宮沢賢治」像  
高田厚 作



玄関広場「ボランの広場」



光と音の体験室「スバル」



映像体験室



街並展示室「モリーオ」



喫茶「あこがれ」



常設展示室



2F 展示ホール(企画展示等)

【あこがれ】(石川啄木)



啄木の処女詩集。明治38年5月3日、東京の小田島書房より発行。定価50銭。序文を上田敏、跋分を与謝野鉄骨が書いている。巻頭に啄木は「此書を尾崎行雄氏に献じ併せ遙かに故郷の山河に捧ぐ」と記している。この本を出版してまもなく啄木は節子との結婚のため盛岡に帰った。

【一握の砂】(石川啄木)



啄木の処女歌集。明治43年12月1日、東雲堂より刊行。定価60銭。校正刷があがってきた10月29日は、生後24日での世を去った長男真一の葬儀の日であった。啄木は夭折した愛児の死を悼み、挽歌8首を追加。「盛岡の中学校の、露台の欄干に最一度我を倚らしめ」ほか計551首が5章に分けて取られている。

【小天地】(石川啄木)



明治38年9月5日創刊の文芸誌。定価12銭。啄木は同年6月4日より稚子小路で新婚生活を始める。そこで両親と妹と一緒に、3週間暮らした。その後加賀野町に転居し、文芸誌「小天地」を発行したが、1号のみで終了。主幹・編集人石川啄木、発行人石川一禎。与謝野鉄骨、新渡戸仙岳等の作品を掲載。啄木自身も長詩3編・長歌・短歌を、妻節子も短歌「こほろぎ」他(13首)を発表している。

心象スケッチ【春と修羅】(宮沢賢治)



生前に刊行された唯一の詩集。賢治はこれを詩集と呼ぶことを嫌い「心象スケッチ」と称した。大正13年4月20日刊。実質自費出版で1000部発行。「小岩井農場」「無声痛哭」などの詩が収められている。賢治は、この「春と修羅」発行後、「春と修羅第二集」「春と修羅第三集」の発行を予定していたが、実現できなかった。

イーハトヴ童話【注文の多い料理店】(宮沢賢治)



宮沢賢治の生前に刊行された唯一の童話集。大正13年12月1日刊。発行者は近森善一(杜陵出版部)。 「どんぐりと山猫」「鹿踊りのはじまり」などの童話が収められている。初版本刊行の際に作られた広告ちらしに次の文が記されている。「イーハトヴは一つの地名である。(中略)実にこれは著者の心象中に、このような情景をもって実在したドリムランドとしての日本岩手県である。(後略)」

【宮沢賢治直筆書簡】

のちの直木賞作家・森莊巳池(もりそういち:本名/森佐一)に宛てたもの。大正14年2月9日から賢治が亡くなる昭和8年9月までの間に約20通出され、現在もりおか啄木・賢治青春館に保存している。



石川 啄木 いしかわ たくぼく		宮沢 賢治 みやざわ けんじ	
明治19年	2月20日 岩手県南岩手郡日戸村(現盛岡市玉山区日戸)の常光寺に生まれる。住職の父は一禎、母はカツ。本名 石川一。	明治29年	8月27日 岩手県稗貫郡里川口(現花巻市)に誕生。父は政次郎、母はイ子。川口尋常高等小学校入学。
明治20年	浪民村(現玉山区浪民)へ転住。	明治36年	川口尋常高等小学校入学。
明治24年	浪民尋常小学校に入学。	明治39年	鉱物採集に熱中。
明治28年	盛岡市立高等小学校に入学。	明治42年	受験のため母と盛岡市紺屋町三島屋に宿泊。盛岡中学校入学。父に伴われて寄宿舎・自彊寮に入る。
明治31年	盛岡中学校に入学。	明治43年	招魂社(現盛岡八幡宮)参拝。植物採集岩手登山隊に参加。初めて岩手山に登る。
明治32年	菊萌版摺の雑誌「丁二会」発行。	明治44年	小岩井農場へ遠足。
明治33年	英語力を培おうと英語自主学习グループ「ユニオン会」を結成。回覧雑誌「丁二雑誌」第1・2号発行。盛岡女学校に通う堀合節子と恋仲になる。	大正元年	仙台方面修学旅行。(狐禅寺から川蒸気船で石巻に至り初めて海を見る)
明治34年	回覧雑誌「三日月」第3号、「蘭伎多麻」(きたま)第1号発行。「翠江」(すいこう)のペンネームで「岩手日報」に短歌を掲載。(初めて活字となる)	大正2年	舎監排斥運動で寮を追われ清養院へ下宿。北海道修学旅行。(函館～小樽～札幌)
明治35年	文芸雑誌「明星」に「白蕨」(はくひん)の名で短歌を掲載。文学で立身することを決意し、盛岡中学校を退学。上京して与謝野鉄幹・晶子夫妻らと知り合う。	大正3年	盛岡中学校卒業。(第28回生)岩手病院に入院。(5月中旬退院)
明治36年	浪民に帰郷。「岩手日報」に評論「ワグネルの思想」掲載開始。11月、新詩社同人となる。初めて「啄木」の名で「明星」に詩「愁調」を発表。	大正4年	盛岡高等農林学校入学。(農学科第二部)寄宿舎に入る。(土曜午後、日曜日は盛岡郊外を散策)
明治38年	処女詩集「あこがれ」を小田島書房より刊行。堀合節子と結婚。文芸雑誌「小天地」を刊行。	大正5年	関西方面修学旅行で初めて上京。
明治39年	浪民尋常高等小学校の代用教員となる。	大正6年	下の橋際の玉井郷方家に弟清六と下宿。同人誌「アザリア」創刊。
明治40年	函館市弥生尋常小学校の代用教員・函館日日新聞社の遊軍記者となる。函館の大火により職を失い函館を去り、北門新報社(札幌)・小樽日報社を転々とする。	大正7年	盛岡高等農林卒業・研究生となる。童話を書き、姉妹に聞かせる。
明治41年	釧路新聞社に勤務。「紅筆便り」などを執筆。春、東京本郷に転住。	大正9年	盛岡高等農林学校研究生修了。突然上京。
明治42年	東京朝日新聞社に校正係として採用。雑誌「スバル」を創刊(発行人義人)。健康上の理由により、小石川へ転居。	大正10年	花巻に戻り、稗貫農学校(県立花巻農学校の前身)教諭となる。心象スケッチ「くらかけの雪」「小岩井農場」などを書く。妹トシ死去。
明治43年	12月処女歌集「一握の砂」を東雲堂書店より刊行。	大正11年	北海道・樺太旅行に出発。
明治45年	3月、母カツ逝去。4月13日、友人若山牧水や妻節子らに看取られる中、肺結核にて世を去る。享年、弱冠27歳。死後、第二歌集「悲しき玩具」が東雲堂書店より刊行。	大正12年	詩集「春と修羅」出版。イーハトヴ童話「注文の多い料理店」出版。
		大正13年	森佐一編集「貌」、草野心平編集「銅鑼」の同人となる。花巻農学校を退職し、花巻市下根子楼で農耕自炊の生活を始める。羅須地人協会を設立。
		昭和3年	急性肺炎のため自宅療養。
		昭和6年	東北砕石工場技師となる。「雨ニモマケズ」を書く。
		昭和7年	童話「グスコブドリの伝記」発表。
		昭和8年	病床で童話や詩の推稿を続ける。9月21日 37歳 午後1時30分 逝去。父への遺言により「国譯妙法蓮華經」を知友に贈る。